



Title	都市社会学 : 昭和28年度特殊講義案 第7巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1953
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77390
Type	manuscript
Note	東洋大学社会学部大学院社会学研究科講義案。都市の近代化と都市の分類。
File Information	N014_01S28.pdf



[Instructions for use](#)

NOTE BOOK

Made of paper
Specially selected at your demand

都市社会学

二十八年
特殊讲义案
第七卷

都市の近代化と都市分類

AY
A6



本ページの両方
が五五字

都市の近代化と都市の分類

一、系集要素の史的発展

二、都市の史的発展と近代化

三、近代化の方向

四、近代化による都市の分類

五、従来の都市の分類

一、記号学的都市分類

1
2. 高麗、遼北方の歴史的發展

人類の古い歴史を顧みることにより、經過する
と高麗、遼北の型の推移を大きく分け
て考へると次の様に分るであろう。

第一時代、血縁が最も強い、北の結合の

紐帯で、血縁圏が移動的或は半

移動的の生活を営んで居た時代。狩猟、

狩獵、遊牧、漁撈の時代である。

第二時代、農耕を始めて土地に定着し

村落をたてた時代。村落は

初期には、
また血縁は北の紐帯として有力であ

るが、次第に地縁が有力となり、

血縁を駆逐せしめて地区集團が

此村落以外の基本的な結構となる。

封建時代——村落以外の相當に発達した

封建都市の成立を以て封建時代を

築出し村落と平行して發展して来

た。此都市は封建時代の祖型として

村落を中心として地区集團を組織す

るよりよ、發展しやうとした。

都市を築き出したの作人が交易を必要

としこれを制約せしめなければならぬ

要を感じ始めたころと政治的武力的

活動が征服や統治の爲の便宜な足場

として都市を利便し始められた。

江戸時代——従来都市は位階の密集地であった、職掌の治部も位階成り行つて居たが、産業革命と共に大々たる産業都市が都市に起り新らしい大々たる学校の子供も又都市の位階の間に割り込んで来た時代。ここは地と業の関係を融通して職柄の線が新形式の都市に於ける品物強さを以ての都市と成つた。

明治時代——これは予想され、未だの都市である。そこは今の如く極に位階の

守山島地はななく、その即ち職場の集
 合地である。住居は都市の外部に主
 として職場の縁によつて作らるる村を
 ながすであらう。かくの如き村は都市を
 とりまく外周に多量に出来て来る。都市
 の内^部にある職場は、オフィス街（官公庁、
 銀行、銀行、銀行）（商店）
 街（デパート、専門店）工場街（動力
 に電力を用いるもの）の間に区別される。
 多くの労働者は都市の外周の村に
 分散し、又石炭を動力に用いる工場
 は更に外周にある停車場の附近に

工員住宅と其に隣接す。病院は
甲子成の各地に大に巡遊流々所々所に
あつて、へんなく既望せられよ。

右の五時代の成り四時代迄は過去の歴史
とし、素たす実心あり、五時代は其の
成り実心もついで、將來あり、可しと思は
れ、方向である。

十八世紀後半（一七六〇年以降）まで幕府治世
 都市十九世紀前半の幕府治世と共
 都市人の急増と幕府の近代化の萌芽の
 前と後と云ふ所に
 今井 川 宗 吉 著

2. 都市の歴史的発展と近代化

都市は幕府治世の前期に於ては

な程過るといへると思ふ、その内

に近代化の政策は明治時代から

に進展する過程と云ふべきであらう。

は具体的に居住集落としての都市に

戦場が割り込んで来た事を意味する。

居住集落としての都市は地区集団

の連続によつて発展して居る。

それら戦場の基礎の上に成り立

た地区集団の増殖は漸次地区集団を

駆逐し消滅せしめて居る。現在と

小、大都市はかくつた、北能に在る。

それ、都市発展の初期時代の模範、

あり。

都市の近代化の進展の程度は都市

毎に異なり、日本の現在多くの部

市は大部分中世の城下町であり、今

尚ほ整備した地区集団を異にする

ところか少くはない。それ等の都市には

新興の巨工や学術の中心地、（先分は多く）

二層あり、あり。都市人の総数の中

新興の巨工や学術の中心地、人にかその

何パーセントからなり、これは従来の地区集

2、

① 同様の措置は解消するものがある

2. それを何パーセントであるか未だ明らか

ではない。

新豊の巨欠り条件をなすものは主として高

野工業、運輸業、商業等である。

新豊の工業化と云ふのはその

に位置とより分離し、その工業化の基礎

の上、各種の集団を構成する地区集団

を形成するに足る文の集団活動が具はつて

片に^(おもしろい)その了る可成り程度以上

に規模が大であるか、ゆわの存である。

その飛居以下の工業化は

明治以来の宋内工業時代の従来の
職物と田舎の序なり。それは産業革命
以前の職物であるには温情的な慣習が
義理の原則を乱用し封建的秩序の中に
定まり他人の自由を去りし業あり、
徳物の如き上下の秩序をその記号を守つて
居る。から如き上下の秩序に対して自由
平等の旗をかかげて現われぬが新皇の職
物の記号である。そこには義いと共に古
権柄が記号される。労働関係はかゝる如き
階級の職物に於ては先小よりである。か
労働と関係が企業を以て対して対する。

了りたき事、よゝに仕事御之例に於ける式、種族
の職人は、其の如くある。故に種族の如く、
に於けるは、その志は、徳義的、服従を強められ
権柄の元法を定むる、其の如く、近代化され
職柄の如く、その如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
凡そ徳義的、其の如く、其の如く、其の如く、
の職柄は、近代化され、其の如く、其の如く、
である。其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
上の職柄は、近代化され、其の如く、其の如く、
か。

二十一年、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

尺よりの任務を負ふ何人以上の職か。事務
 担当は、清潔に汚知して尺よりのは何人以上か
 ストライキに考かした組織あり、は何人以上
 の職か。定分の医療施設を維持して尺よりの
 は何人以上の職か。これ等の夫が是、つぎへ
 小を承はならぬ。余が若干の都市について
 調査をしたところによれば、凡そ 人以上の従
 業員の職場が、近代的性格の職場と
 事な出来、存である。

都市に於いては、一宗の族の人の数四人とすれば、その
 都市内の 人以上の職場は、従業員の総数
 が、その都市人の総数の約八分の一を占めし

「所」は、近代化の息吹の下にある人々は
この都市人口の殆ど半表である。と云ふようになる。
その都市への殆ど半表が近代化の息吹の下
にある。たゞ、其の都市は全般的に近代
化して地価も安くなり、
殆ど半表を必要とするか三分の一にしてその都市
は近代化して行くか、多くの調査の結果より推
定したければ、
定したければ、
定したければ、

一宗に不審大お、
田の人か職人の人か
に竹倉へ丸詰めか、
定すよりか、
定すよりか、

こ
い

余は、誠の心調子の、結果は、
引表の、所である。

政制に於ては中世より近世への移行は
都市政制より口民政制への移行である
然し日本では都市政制の時代は
市民権の獲得は都市政制の時代は
市民権の獲得は都市政制の時代は
市民権の獲得は都市政制の時代は
市民権の獲得は都市政制の時代は

即ち政治の時代は中央の威光を失ふ
地方都市は地方豪族の統制の下に
あり、このあたりで地方豪族が中央
の支配の保障を失はば都市は存立し
得ず、このあたりで中央の威光を失ふ

3. 近代化の方向

近代文明の方向は他人と无自由を尊
重し他人を拘束す一切の西郷律より

他人を解放せしめやうとし、其の

には勇敏に合致せしめよ、是の傳統

を断ち切り、是の「中央」の中に其ま

る道義や感情を排除し冷徹な

契約的関係のみを認め、
(都市に権威を認めよ)

とす。これか近代人の生活態度である

かくの如き生活態度の近代人は封建的身

分を捨て、
(更に) 道義宗族を捨て、
(更に) 宗族

同族の古い物束より脱かれ、
互に地縁的

物より解放するの爲に集團の色を

の形に之を放棄せしめたる。天誣に自

由を歐殺す。彼は亦や宗族の最小型に

ある夫婦宗族と十市の政治体としての

治安の必要と世帯と宗族との一宗と民

二つの集團以外には彼等拘束するものは

たのい答であつたが、彼等の友人等は皆

甚下しく拘束の多し職域に於て自分を以

てけりたけはたゞ知らる。自由を吐棄し

平素の理想とする近代人が此の拘束の後

い最も上下的地位を拘束する所の職

場に対するつけよれり、それは近代都市

①
大々たる陸揚の正

何千何万の人か一覺ん事あり、大きなアハ

トは何千の人か一棟の下に舟し、大百億と

然んは日ん何万の人群を出入しし片

何千の人を運ぶ船船あり汽車あり

の第一の矛盾である。第二の矛盾は

他人を其自由を尊重する近代都市

は亦この機械の進歩と共に大量生産

と其に大量消費が行はれ、（東洋は異質）

亦、この巨大な人群を運ぶ巨大な

も人群を便法を（言はるべき所の山）巨大な人群

を有するに、（おのれ）何千も巨大な生活である。

巨大な生活の中心は他人の輿論に支配され

他人は巨大な運河に然る（たどる）進路を

はかり、ある。他人の行動を支配する

機械は他人の運河の大量の人の生活を

に動かして居る。他人の停止はゆゑである。

是こそは他人は皆機械となつて居る。
（たゞいふはこれだけ）

④ 82
階級闘争の闘士等は一切の物己的の
のを犠牲にして階級に奉仕し階級の爲に
戦つて居る。

近代大都市の生活は巨大生活である。

それは近代都市の第一の矛盾である。

第二の矛盾は第一の矛盾と第二の矛盾の

合作から生ずる第一の矛盾である。本

(他人の権威)

来他人の地位は地位向上の爲に生じた労働

組合運動は階級の運動である。

甚だしく中央集権的統制的である。

階級は他人の奉仕を爲すに在る。故に

作の目的を他人の奉仕に在る。故に

都市の職分は都市の奉仕に在る。故に

職分の本質を結合して成る都市の各職分

労働組合が聯合して都市内の全職分を

合して形成して是の聯合体は是の都市の

（恐らく）

他人を奉仕した

ル所は、皇國の皇國組織である。此皇國

皇國の近世化は都市化の進

歩である。方角は、（はなはだ） ありあつた。

氏臣大下、皇國の為には、我身は

皇國の武士の生を能く、友は常に

皇國に定むる所なり。封建時代の武士の

能く、皇に比す可きあり。個人主義自由

主義の原則の上にある。近代の職

業は、（統制の漸進的中央集権的階級） 近代

の矛盾の矛盾である。

第一の矛盾は自由をねがふに在り。第二の

皇國も解放された近代人が、（都市）

都市

物事の多い近代的職場に参入して居

る。

その矛盾は個人主義自由主義を

究極の目的として成長させて来た近代都

市はもて巨大生活の中に個人を自由

を支配して居る。

その矛盾は個人生活の擁護のために

生かす労働組合運動は個人生活

を犠牲にして居る。労働組合の上、^{（争形式）} 階級

階級を以て然りて居る。

その三つの矛盾は明白な矛盾であるが、

避け難い矛盾の様である。この三つの矛盾

をいつかして考へるとどんなふうになるか。近
近代化が進むにつれ、他人より我自由之我
の中心は愈々高くなるか、それは宿念佛
に非しく、他人は愈々職務を必要とし
職務の拘束は愈々少くなる。又都市の
巨大生活は愈々大規模になり、他人は愈
々機械化された生活をしなければならなくな
る。階級闘争は愈々少くなるか、
その闘争は職場の跋扈や巨大生活の
増大を伴ふ定まつてはなく、財の分配や
人の配属に非ずして、形式を考へて片ん
過ぎない。故に都市そのものの発展

方向を修むしやろとすのはな。細くは
都市を愈々職場中心となり巨大生活
にその特色を帯びつつは近代化の方向は依
然として存続して行くよと思はれぬ。

4. 近代化による都市の分類

単しく都市と云つても前近代の都市

と近代の都市とは其性格、大きく異

つて、そのことを区分するは概念の

整理、爲にも是の施策の爲にも必要

なつてゐる。前近代の都市と近代の都市

の相異は都市の村境の相異にも匹敵

す。相異であるからである。

然るは前近代の都市と近代の都市の相

異は、之を如何なる点に在りてあるか。

私は両之の相異を之として法の臨む

見出しを以てする。

前近代的都市

一 地区集団の整結構

一 巨大職域の未発達

一 家内工業的工業

一 労働組合の未発達

一 家族的生活

一 直系家族

一 娯世帯強くなし

近代的都市

一 地区集団の解消

一 巨大職域集団の整結構

一 大工場工業

一 労働組合加入者大都市人口の百分之以上

一 巨大生活

一 夫婦家族

一 娯世帯多し

前近代の都(市)と近代の都市の相異は、
この如き諸点にあると思はれ、近代
的都市たるに比して、或る程度の人を規模が
自か、必要であらう。都市の人の大か小を
よるは、直ちに都市の近代性と近代性を
区別つけ、^{これは}要するに、^{これは}巨大職
域の存在の為に、或る程度の人を
必要とする。然し人の量も相ある大なり。
都市^にも、前近代の都市はあり。
都市の近代化に、^{これは}必要とするは
巨大職域の存在である。即ち、巨大職
域が近代化の性格を打つて、^{これは}は

号佛理合の活知んよ、自由を和合程之
或。或去又佳道く水よか、てあよ。

然うは都市の近代化を最も推進して、
勞働組合つちより、何をけはなうぬ。

古い時代より人の團結力を借材したのは、
探取地位の人であつた。王室の一族古世、
武士中世、
武士近世。

宗憲く然う。下層探取的地位の人は、
結束するや、女をまつた。それか、
結成した時である。

若御名か、皆身近かに相寄り、
若御理合を結成した時である。

女へ、女の大衆結成の機縁である。

5 従来の都市の分類

従来の分類は大体次の四種に属して居る。

- 一、人口規模別分類
- 二、機能別分類
- 三、形態別分類
- 四、工業別分類

人口規模別分類は例へば次の如きものである。

人口

—5,000—10,000—20,000—50,000—100,000—100,000—1,000,000—

田舎村	地方町	小都市	中都市	大都市	百万都市
-----	-----	-----	-----	-----	------

(本邦都市地理学 p. 271)

掲載分は例へに略すものがある。

- 一 工業都市
- 一 地方工業都市
- 一 工業都市
- 一 工業都市甲
- 一 工業都市乙
- 一 工業を伴ふ地方工業都市
- 一 工業を伴ふ工業都市
- 一 工業都市
- 一 工業都市
- 一 工業を伴ふ工業都市
- 一 工業都市

(おの氏同上 p.262)

其外高学都市 A 及び高工業都市、工業都市。

銃器都市を分れるもの (土井博士) 豊型工業

高型交通型公務型平均型を分けし者へ

(西田博士) 也。

(同上 p.259)

形態の分札は例へば次の如き分札である。

- 一、長方形
- 二、集圓形
- 三、ヒトデ形
- 四、衝柄形
- 五、不規則形

(木内氏 p.258)

丁史的分札は例へば城下町、北条町、

高草町(宿坊、市場、港)の分札である。

木内氏は

一、封建的基礎に立ち、その好発(寺)の懸着

なるもの

二、封建的基礎を對し、主要なものは
相對的に發達の鈍化した山の

三、明治以降の發達したものの

右の分札が可成り多いことである。

おめは
P.257

凡そ分札は換金制度の準備として必要であるが、それは水の梅子の意味からすると分札の存在の必要である。私達は都市を今社会的統一体として認め、それとして分札して行くものであるが、都市の分札に於いては私達は都市の社会的性格を整理するにすぎず分札しやうと思ふ。但この都市の社会的性格を備へて行くには必要は何であるか。その必要をいふと、分札を都市の社会的分札であるに

相違あり。私はその原典を在都市の
近代代の税として見ると認めて居る。こ
前記市役所の丁史の資料も要する封建
時代の市税に属し、又先の大都市と明治
前の藩政を以て時代の区別によつて見せたり
之たりする。都市の別以外なき。一の
封建時代の都市と、その外に於ては、ものは
その都市が封建時代の性質によつて見せたり
其の沿革を以て時代の区別にも属して居る。
都市を以て、二の鈍化して、ある都市は
封建時代の性質を以て見せたり、又ある都市は
時代の区別に属し、或る都市は、

三の市況は、河川の環達したものは、陸本を以て、
代の市況を、意して、先れ、其之、二、市、部、市、で
ア、。三、二、に、相、対、的、な、近、代、化、の、程、度、を、本
を、示、し、て、居、る。

次に、既に述べた、如く、都市は、結、核、を、以、て、し

この機能をも有するものがある。特に、特、殊、の
社会的使命を、負、つ、て、居、る、市、も、あ、る。

口、内、の、多、くの、都市は、皆、若、く、は、老、成、の、山、灰

針、糸、市、を、以、て、の、名、品、市、物、産、品、市、を、以、て、し

の、如、く、牧、畜、の、如、き、は、打、立、て、居、る。可、謂、近、代、化

工業、市、に、は、打、立、の、必、要、が、あ、る。此、二、乳、の

市、は、先、職、業、人、を、以、て、主、と、し、て、居、る。分、は、銀

其の二、整理である。尤その整理を以て
しあるが、多くの近代工業は競争を以ての
競争の上にも立^地するものであるから
その^実上二者の区別は容易にはなつて
然し大企業体は之として工業に伴ふよう
であるが、近代工業の発展に伴ふ
五ヶ文、其の競争は近代化に伴ふとい
はれ、この二つは競争の他、近代化の程を以て
競争の同じである。

~~都市景観区分済~~

都市の景観を構成する建築物は

次の各様である。

一、住宅

(独立住宅、長屋、客の宿舎、アパート)

二、職場建築物

(工場、役所、学校、ホテル、商店、銀行等)

三、公共建築物

- イ、娯楽・休息場のためのもの (公園、グラウンド、競馬場、浴場、釣堀)
- ロ、交通ののためのもの (鉄道、電車、橋、地下道) 飛行機場、空港、駅
- ハ、学校 (私立、公設)
- ニ、図書館、劇団、公会堂、病院

都市を分札

才一 旧来都市

才二 新興都市

——
時的分札

A 住居都市

B 職場都市

——
機能分札

組合を分札

才一 旧来都市

——
A 住居都市
B 職場都市

才二 新興都市

——
A 住居都市
(墨中・帯広)
B 職場都市
(不情・定南)

都府年鑑の分札では豊中市も播磨守府
廿五カ村も播磨守府、これは住民の職
分札 どの不通者は明白。
又は播磨守府

都府内の職階による分札の
分札、工業部、高等部、市
知し都府の職階も位階も共に考慮し
廿五カ村加わればなる故に豊中は住居部
市、廿五カ村は工業部市である。

都府の土地の上へ人かどんな活動をし居
よかにより分札がほしい。その土地は人の
どんな活動に提供されべきか。居住の如
か、産業活動の如か。その分札が一身大
分札でなければならぬ。

産業活動部には色々ある。高等工業、交通
行政、教育、芸術、死生、音楽、文芸。

これは職階の存在による分札で、人による分札
の分札、人の職階による分札はなく、職階
の分札形式による分札である。

職階の分札が、大規模の並立か、大規模
のものか。それは階層の多寡の存在か、大規模
否と比較的多くはない。これは存在の存在か、大規模

存在の存在か、大規模の存在か、大規模
の存在の存在か、大規模の存在か、大規模

の存在の存在か、大規模の存在か、大規模
の存在の存在か、大規模の存在か、大規模

の存在の存在か、大規模の存在か、大規模
の存在の存在か、大規模の存在か、大規模

の存在の存在か、大規模の存在か、大規模
の存在の存在か、大規模の存在か、大規模

の存在の存在か、大規模の存在か、大規模
の存在の存在か、大規模の存在か、大規模

はるるを言ふ。此の事は一般に大正時代の
存在の形によつて知られよ。

産業の形と云ふより必要なり。此の形

へ、小か、然しそれは果して小か、大の生活

的意義をもつて小か、大の生活とは人の

生活の活動は工業であらうと云ふのである。

さうと云ふのは他島帯の藤條にほなひか。

まして大か、小か、生産のさうさうと云ふ

であらうかと云ふと、徳くうさうの人のを

あつて、小か、大か、は別物である。又、大の

金、小か、大か、は共に、人とは、小の

である。此の、小か、大か、を、大か、小か、

を、大か、小か、を、大か、小か、を、大か、

は、大か、小か、を、大か、小か、を、大か、

小か、大か、を、大か、小か、を、大か、

小か、大か、を、大か、小か、を、大か、

小か、大か、を、大か、小か、を、大か、

小か、大か、を、大か、小か、を、大か、

小か、大か、を、大か、小か、を、大か、

考案は

人と人との結合。同様の現象
史の上

△階層の結合
階層の結合は、この対立を意
識し、異質化したのは、政治における
最も大きな特色をゆきとめ、ゆきか
らである。

政治学の問題である。

私は、この結合の立脚より、最も重要
なるべき都市分れの根拠を考へてみる。
人種史の歴史の上、政治を貫いて考へると
人と人との結合、同様の現象を中心として

階層の問題は、政治の人同様の結合
の最も大きな問題と考へてみる。然し

に都市の分れをおいて、私は、その下に

ある、ついでと考へて、最も根拠を考へ

てみる。然し、これは、都市の結合、並に、都市

と大いなる存在の都市、この区別

即ち、都市の結合、都市人としての

の結合、都市の結合、都市人としての

結合、都市の結合、都市人としての

結合、都市の結合、都市人としての

政治の結合、都市の結合、都市人としての

市議部

作中其の部員に於ては、總數の全に於て

の總數は其の數の數、其の部員の人

口の十五分の一以上あり、あるは

を即ち市分札の基準とする事、

其の、後、百人以上と云ふ事にも又

全市民人の十五の一と云ふ事にも又

也、其の存する事、今それと

詳述す、余程は、百人以上は、

絶對的な階級的關係が形成され、後十五分

の一に達すれば、その全市民の生活に絶對的

な影響を及ぼすことになり、

此の分札は、近代都市と近代都市の

分札が意味され、其の身へ、

其の、

か、右の如き煩瑣な分札は分札とし
好まぬといふてはなす。分札の二つの原札は
同法に取扱ひをせよとす。

右の分札は近代化の便化を急務とするに
し即してかくの如き近代化が都市を区別
す。前記の如きな様式はありわらぬとし、
都市の近代化を足分たしとて平近かた
を扱はなすといふてはなすか。

才九巻下

都市の社会的統一性

才十巻下
都市の近代化と都市の発展

才十一巻下

都市社会の発展

才一章目

都市の社会を研究する序説

才二章目

都市の社会の概念

（一）才二章目九節六項考出

才三章目

都市と村落の別

才四章目

都市の社会構造

才五章目

都市の外部的社会構造

才六章目

都市の諸集團

才七章目

都市の社会関係

才八章目

都市の社会（一）階層、群衆